

凡例

1 同内容表現

2 対比表現

3 否定→肯定（XではなくY）

4 譲歩表現（確かにA、逆接語B）

5 逆接語＋筆者の主張

6 具体例の読み解き方

7 因果関係

8 時間・時代の変化

9 空間の比較

10 常識批判

11 疑問→解答＋根拠はワンセット

12 呼応表現

各表現のキーワードと、その掲載ページ・行数です。

■ つまり (↓ P. 14・25)

覚えることで、表現や構造を発見できるキーワードや読解ポイントを掲載しています。

★同内容表現を発見するためのキーワード

- ・ 要約⇨つまり、要するに
- ・ 指示語⇨これ、それ、こうした、など
- ・ 定義語⇨とは、～ということ (もの) は
- ・ 換言⇨すなわち、言い換えれば

■ 読解図

各表現のキーワードに青地にして、見出し語は青文字にしています。
実際の用例で論理関係をつかみましょう。

作品そのものが**特殊**から**普遍**へと性格を変える
＝つまり
作品が古典化する

各表現におけるポイントを理解しましょう。

💡 ポイント

論理的読解の最初の一步は、同内容表現を追跡することである。一つの単語に筆者独自の定義を与えたり、長文で説明した事柄を一文でまとめたり——というように、筆者は、自分の説明したい内容をさまざまな表現で言い換えていく。よって、**同内容表現をつなぎながら追跡すること**で、何となく問題文を読んでいた時に比べて、文章の内容理解度を格段に上げることができる。

「つまり」や「要するに」は、厳密に言えばイコールではなく、それまでの内容を端的にまとめた「要約」である。しかし、文章を読解する上では、同内容表現としてとらえて問題ない。

1 同内容表現

■ つまり (↓ P. 14・25)

★同内容表現を発見するためのキーワード

- ・ 要約⇨つまり、要するに
- ・ 指示語⇨これ、それ、こうした、など
- ・ 定義語⇨とは、～ということ (もの) は
- ・ 換言⇨すなわち、言い換えれば

■ 読解図

作品そのものが**特殊**から**普遍**へと性格を変える

＝つまり

作品が古典化する

💡 ポイント

論理的読解の最初の一步は、同内容表現を追跡することである。一つの単語に筆者独自の定義を与えたり、長文で説明した事柄を一文でまとめたり——というように、筆者は、自分の説明したい内容をさまざまな表現で言い換えていく。よって、**同内容表現をつなぎながら追跡すること**で、何となく問題文を読んでいた時に比べて、文章の内容理解度を格段に上げることができる。

「つまり」や「要するに」は、厳密に言えばイコールではなく、それまでの内容を端的にまとめた「要約」である。しかし、文章を読解する上では、同内容表現としてとらえて問題ない。

2 対比表現

■ XはAだ。〈逆接語〓しかし〉YはBだ。 (↓ P. 22・27)

★対比表現を発見するためのキーワード

- ・ Aは〓。〈逆接語〓「しかし」「だが」など〓 Bは〓。
- ・ AとB
- ・ 一方〓、他方〓
- ・ 〓に対して、逆に、反対に
- ・ 〓とは違って
- ・ 時間の変化 (AからBへ)
- ・ 空間の比較 (Aでは〓、Bでは〓)

■ 読解図

A 近代〈主観〓人間〉が、〈対象〓世界〉の支配者となる
↕
しかし

B 近年この人間中心主義に対する批判と反省が強くなる

💡ポイント

対比表現を発見する際には、①対比のテーマへ〓何について、②対比されている項目へ〓何と何〓、③比較内容へ〓どのように違うのか〓の三点を押さえることが重要。P. 22の文章では、①へ西洋の近代思想における、人間と世界の関係について、②それまでの人間中心主義と、それに対する近年の思想〓、③へ主観〓人間が対象〓世界の支配者であるしかし(↕)その支配を批判し反省が強くなってきている〓という展開である。

3 否定→肯定（XではなくY）

■ Xではなく（むしろ）Y（↓ P. 36・29）

★否定→肯定の読解ポイント

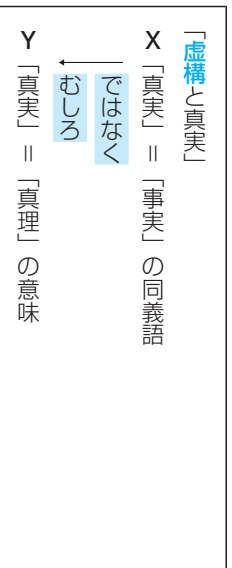
Xではなく（むしろ）Y

Xというより（むしろ）Y



筆者の主張・本音はY

■ 読解図



💡ポイント

筆者が自説を展開するために他説を批判的に検討する場合、〈Xではなく（むしろ）Y〉という表現の形を取ることが多い。この時、**筆者の言いたいことはYの方にある**。また、〈Xというより（むしろ）Y〉というのも、否定表現は含んでいないが、Yの方が重要というところえ方は同じだ。

また、こうした表現では、**XとYは対比項になりやすい**ことも覚えておこう。

4 譲歩表現（確かにA、逆接語B）

■ 確かにA、しかしB。 (↓ P. 62・p12)

★譲歩表現の典型パターン

確かに
もちろん
なるほど

└──┬──┘
A [逆接語] 「しかし」「だが」など B

筆者の主張・本音はB

■ 読解図

……という自然科学の方法論は、

A 確かに世界の聖書の解釈からの決別という意味では画期的なことだった

B しかし……自然を全体として理解しようという態度を失わせてしまった

💡ポイント

ある一つの見解（A）を認めたあとで自分の本音（B）を述べるのが譲歩表現だ。譲歩表現にはパターンがあり、「確かに」「もちろん」「なるほど」の三語＋逆接語というのが典型的な形。文中にこの三語を発見したら、「しかし」「だが」などの逆接語と、そのあとに筆者の本音が述べられることを予測しながら読むのが論理的読解の手順である。入試においても、接続語の空欄補充問題としてよく問われる。

5 逆接語＋筆者の主張

■ しかし〈筆者の主張〉 (↓ P. 184・26)

★逆接表現の読解ポイント

X (一般論、肯定的表現) + 逆接語 (「しかし」「だが」など) + Y



筆者の主張・本音は Y

■ 読解図

合理主義的態度一般＝理性の限界を容認する

← しかし

筆者の主張＝「近代合理主義」は、そのような理性の限界を容認しない

💡 ポイント

前項の〈確かに A、逆接語 B〉という譲歩表現では、B が筆者の主張であることを説明したが、「確かに」「なるほど」といった語句がない場合でも、逆接語のあとには筆者の主張が表れやすい。とくに、P. 184 の文章のように、逆接語の前に一般論や肯定的な表現がある場合、逆接語 (「しかし」「だが」など) のあとには、前説をくつがえす筆者の意見が示されることが多い。

6 具体例の読み解き方

例えば
(↓ P. 90・94)

★具体例の読解ポイント

A
(抽象表現)

例えば
具体的には

A' (具体表現)

A'からAの内容を正確にキャッチ！

読解

国旗や花などの「物」にも私たちは意味を見出している

＝例えば

ある国の国旗を焼く行為はテールクロスを焼くのと
 まるで違ひ、人に花をあげる場合でもカーネーションと菊では意味が違ってくる

ポイント

筆者は、説明したい内容に説得力を与えるために具体例を示す。「例えば」「具体的に」といった語句は、そのあとに具体例が出てくるサインだ。具体例を読み解く際に重要なのは、**その具体例によって説明しようとしている抽象的内容**を押さえること。とくに、抽象表現の内容が抽象的で難しい場合は、具体例の内容を把握することで抽象表現の内容を理解できるケースが多い。

7 因果関係

■ したがって (↓ P. 60・69)

★因果関係を発見するためのキーワード

- ・ したがって、だから、ゆえに
- ・ その結果、なぜなら、というのも
- ・ 〳〵のために、〳〵によって、〳〵の背景には

■ 読解図

近代科学の知と技術文明は……永続的かつ無限に発展するものと見なされてきた

← したがって

現在未解決な問題も、やがては必ず科学によって解決されるものと考えられた

💡 ポイント

筆者の主張や判断には、必ずその根拠が伴っている。よって文章の読解においては、**主張とその根拠とをセットで押さえることが重要**であり、ヒントになるのが**因果関係の表現**である。「したがって」「だから」「ゆえに」という**順接表現**が代表的な語だが、「その結果」「なぜなら」というものなども、因果関係を表す。

また、「〳〵のために」「〳〵によって」「〳〵の背景には」などの語も、文脈によっては因果関係とほぼ同義で用いられることがある。例えば「治療によって回復した」といったものである。

8 時間・時代の変化

■十九世紀には、～二十世紀には、――（↓P. 66・21）

★時間・時代を追う手がかりとなるキーワード

- ・かつては、以前は、～時代（世紀）では
- ・これまでは、従来
- ・AからBへ
- ・近代は～、現代は～

■読解図

十九世紀には、

実験によって検証された理論は自然の永遠の真理



二十世紀には、

理論は実験のための仮説に過ぎない

💡ポイント

一つの時代を説明する場合、その時代の特徴を浮かび上がらせるために別の時代と比較されることが多い。とくに「近代」や「現代」を論じる評論文の多くは、過去の時代からの変化や対比をよく用いる。したがって、文章に時間軸が導入されている場合は、何が「変化」し、どのように「対比」されているのかをしっかりと追うように心がけよう。なお、小説を読む際にも、時間の推移をたどることは必須である。

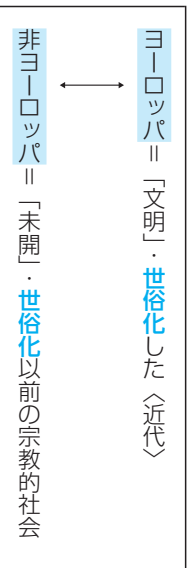
9 空間の比較

■〈ヨーロッパ〉、く非ヨーロッパ、― (↓ P. 182・21)

★空間的対比の手がかりとなるキーワード

- ・西洋 (ヨーロッパ) ↔ 東洋 (非ヨーロッパ)
- ・欧米 ↔ 日本
- ・都市 ↔ 地方 / 共同体
- ・日常の空間 ↔ 非日常の空間
- ・ウチ ↔ ソト

■ 読解図



💡 ポイント

前項で取り上げた時間軸とともに、対比構造の発見の手がかりになるのが「空間」の比較だ。P. 182 の文章の他にも、〈欧米と日本〉や〈都市と地方〉などを比較したものもある。

空間を対比させた文章においても、対比を読み解く基本にのっとり、対比のテーマへ何述べているのか、対比されている項目へ何と何、比較内容へどのように違っているのか、という三点をしっかり押さえてほしい。

■〈常識的科学観によると、しかし、—〉(↓P. 72・01)

★常識批判を発見するためのキーワード

- ・常識的には、一般的には
- ・これまで(従来)はと考えられてきた
- ・と言われている
- ・通説によれば

■読解図

常識的科学観⇨科学革命とはデータの解釈の変化

→しかし(批判)

筆者の主張⇨科学革命によってパラダイムが変わる

と取り上げる問題が変わる

💡ポイント

評論文の典型的な展開として、〈常識の紹介〉→〈批判〉という形を押さえておこう。評論文を書く大きな目的は、「それまで言われてこなかった新しい見方や考え方」を説明することなのだから、およそどのような評論文にも〈常識批判〉の要素が含まれている。よって、「筆者が批判しているものは何か」と考えながら読解することで、筆者の主張をとらえやすくなる。

11 疑問→解答+根拠はワンセット

■ どう表現したらよいのか (↓ P. 84・Q1)

★〈疑問→解答〉型の読解

- ・ どうしたらよいのか
- ・ とは何か
- ・ とはどのようなことか (問題提起)

←
〈解答+根拠〉をセットで把握する

■ 読解図

疑問 II 「名状しがたいもの」が目の前に現れたとき、

→ どう表現したらよいのか

解答 II たとえば **メタファー** に頼ることになる

💡 ポイント

問題文の中に疑問形の文章が出てきたら、それは筆者が問題提起をしている箇所であり、「解答」と「根拠・理由」を与える方向で文章は進んでいく。そのため、「どうしたらよいのか」や「とは何か」といった疑問文を見つけたら、「**解答は何か**」「**その根拠はどこにあるのか**と考えるながら文章を読んでいくのが、論理的な読解だ。なお、こうした〈疑問→解答〉型の文章は、前項で説明した常識批判とも組み合わせることが多い。その場合、〈A (常識) ではなく B (筆者の解答) 〉という形を取りやすい。

12 呼応表現

■ あたかも～のように (↓ P. 186・Q 3)

★代表的な呼応表現

- ・ あたかも～のように
- ・ 決して～ない
- ・ まさか (よもや) ～まい (ないだろう)
- ・ というのも (なぜなら) ～からである
- ・ もし～ならば
- ・ ただ (単に) ～だけ

■ 読解図

人間が人間であることの根拠を理性に求めるこの理解は、あたかも当然のことのように、……

💡 ポイント

呼応表現とは、文中において、ある語句の存在によって、そのあとに決まった語句がくることを言う。古文の「な……そへ||禁止く」「え……ずへ||不可能く」なども呼応表現である。P. 186 の文章の「あたかも」は、あとに「～のように」「～のよう」を伴うことが多い。代表的な呼応表現は覚えておこう。